



金松堂版



名廣 澤邊 初編

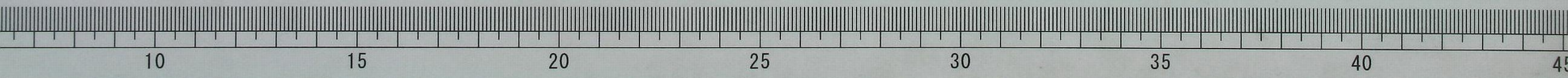
梅堂國政畫圖

京文舎文京著

左田野長



假名垣魯文閣





假名垣魯文閣

上

10

15

20

25

A487
1

名廣澤邊
萍

初篇上

假名垣魯文技園
京文舎文系著
梅堂園政重園



辻文様

名廣澤邊萍初編之序言

時うるくみ何と種ある硯池の萍その草双紙の世に連る架
空無根の談話と省き世み名も廣き澤の水淀くく潤色
み趣向と筑紫の筆の海弘法流の四國小渡り遠く西南の逆波ふ
混ト入糲りたる長物語と短き才み書綴り我いろは兒の
文京が試筆以来四十七號本紙の内より抄録しつ此浄書よ
挿繪と添えし梅の薫りを櫻木の上を書肆の金松堂が今
年の満花と太山府君に祈る恵方の大吉利市老生も昔日
の作男同ト畠けふ一鍬入を實入の結果と俱よ乞ふ

明治十三年二月中旬 京文社長 假名垣魯文題

黄尺刃二

<48-8236>





名廣澤邊萍初編上

東京

假名垣魯文校閱
京文舎文京著述

第壹回

卓論を傍聴て少年時を堅む

春桂は問ふ桃李正は芳華年光處は流つて満つゆ葉を獨り花
なき春桂は答ふ春華さけるは鉅歳をくり久しに風霜揺蕩の
時獨る君知るや否やとに維り春桂問答の長巻の白紙
えり小人朝廷は満ち君子時又遇せされど小人一旦の時紙
得て富貴は不るとも銘く久しからんや乱世の時よ満つ
ては只君子の節を守り衆を勝てて獨り君子の徳を
操り知らんや遠き元治甲子の年攘夷の論昂んぬと
天下の民心はとなく穩りあるま或ひは義を納えて國を



一長拳
 とあり
 天のハ喰
 も森のどく私を
 ありーが
 乃生あく
 沸騰さー付
 大霧を
 公卿
 殺まる
 風霜

漫
 火十
 川野の

四
 主
 瀧の
 浪士
 捕依
 因事と
 雲ひが



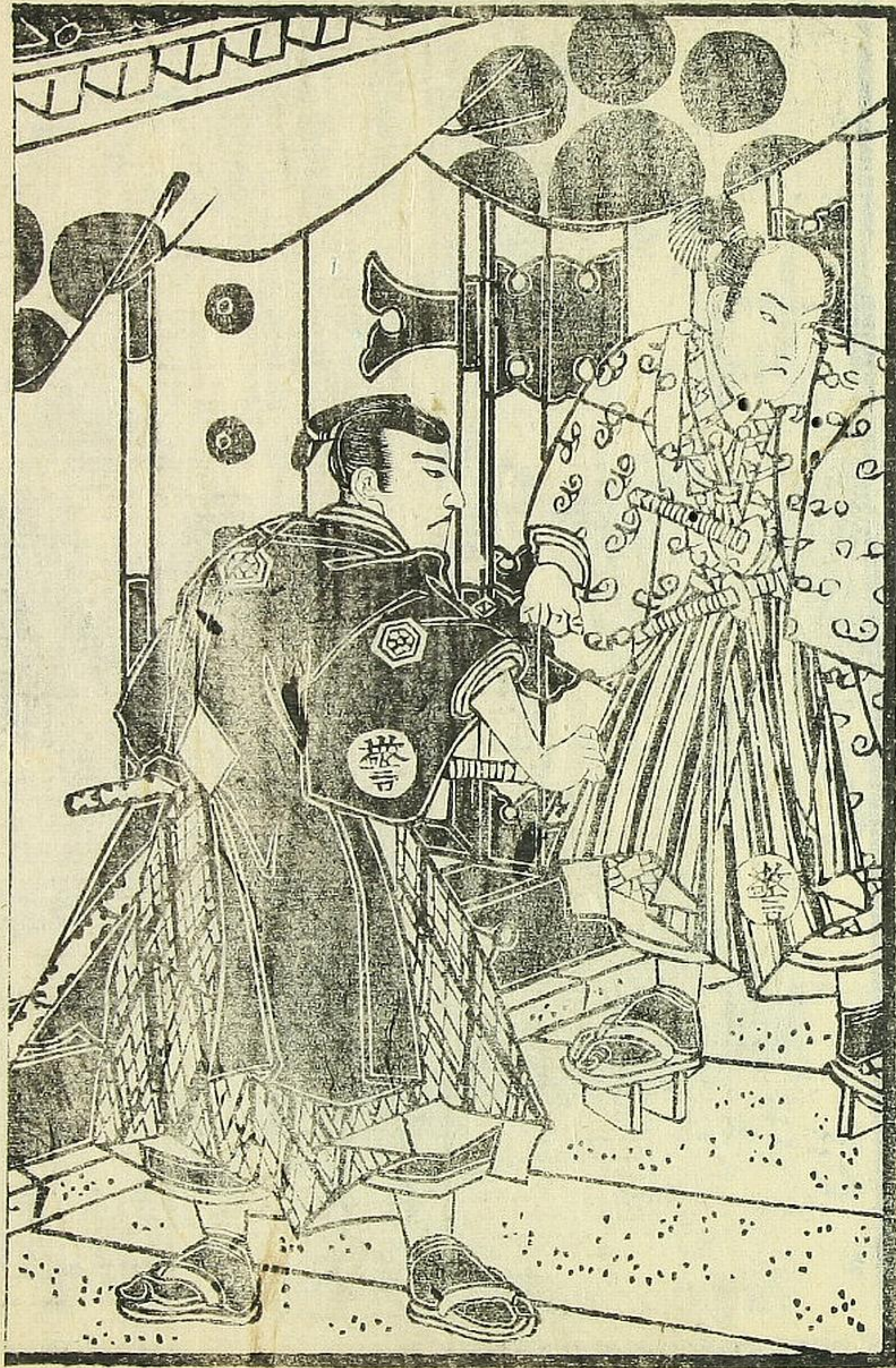
懐
 悲悽の
 澁る如
 勤王と
 糸一腰
 間の秋
 水を
 志むる
 士あり

其の中
 三條
 東久世
 長操

小
 小

尾瀬

三



寛政の世

五



廣波社上

つぎ 尚防備備ふまきて
 勤王の役紙を張るる
 毛利一家のありたりし由
 著書先年申初劫紙
 著るて入京と傳ふらるる
 うべとの所ふ郷由長
 藩士と撰ふ故を
 遠近の輝の小
 川ふ勢を立ちく
 涙の雲とるる
 中由何物う後
 り一空雲
 こそ流れた

▲美々の月影を
 船よ作らぬ
 らんと轉る
 糸の園


▲大
 大まき一羽法院
 の撞き入申今宵の
 のを
 海花階
 下芳系
 長考の風へ
 あり

四

るき 國の爲雲の上あり
人々がん流しはるし明の
内落と石のつと不細火や
消ゆる命の初うそこの
赤らひ黄泉の神や照
後なるるらん物
暁ゆくむら雲の影の
室と流む月の影を
露慮と奉裁ま一國
威とやみ釋ゆるさんと
とより強度み師
遠の附属の浪士と
俗隈と支と

▲緋と國紀とく
忠臣顯たるる
頃荒後之福
者の家
中又板垣
鐵之助と
関元一の
鉄録と

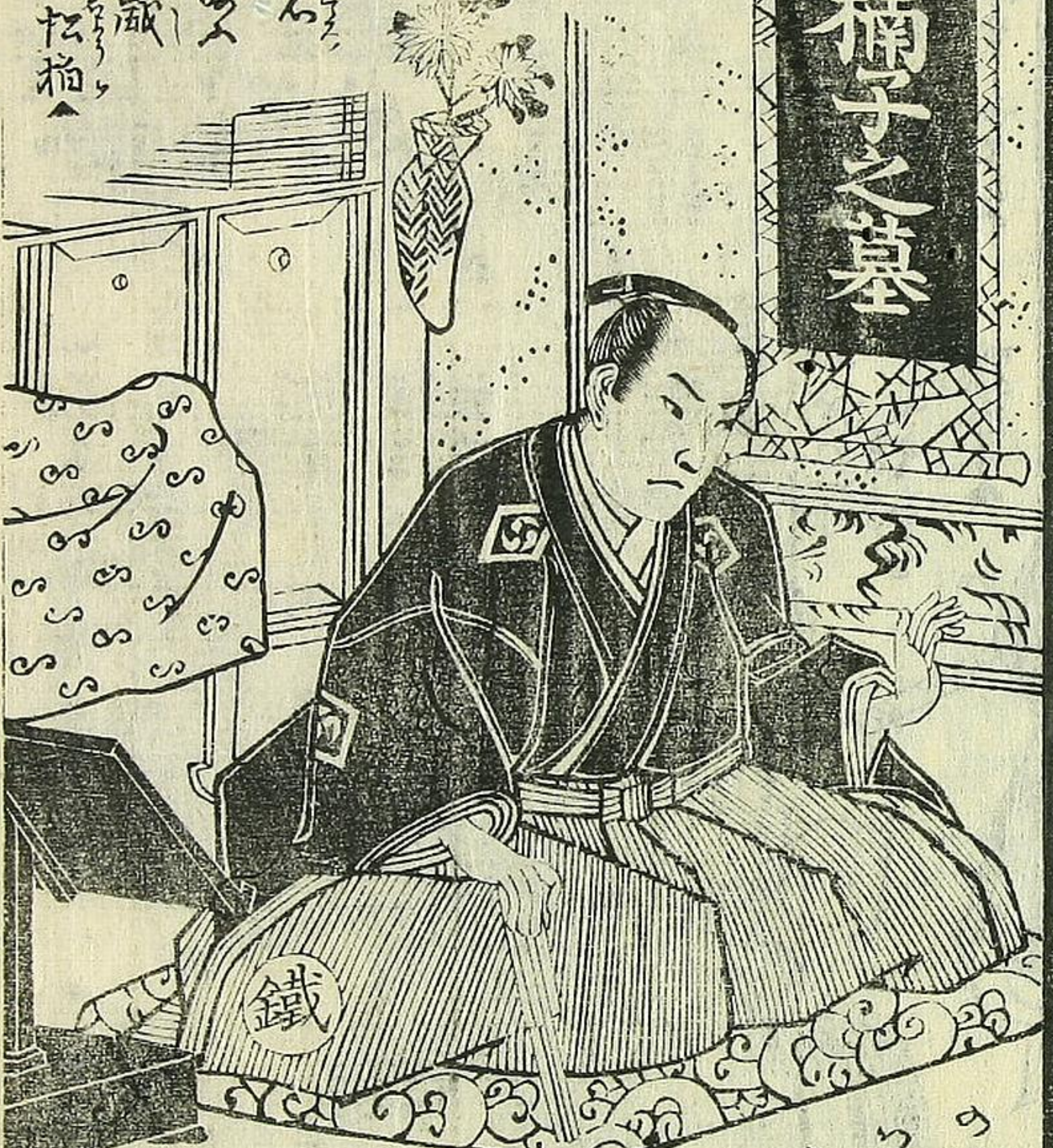
△百石を馬身り扱
あつら風は勤王の
志し流
く水へ
の石田
東郷
先生
の門下
ふとく
博學治
紀ふ流れ
義勝流石も膏あつらる
ゆふ慶國の

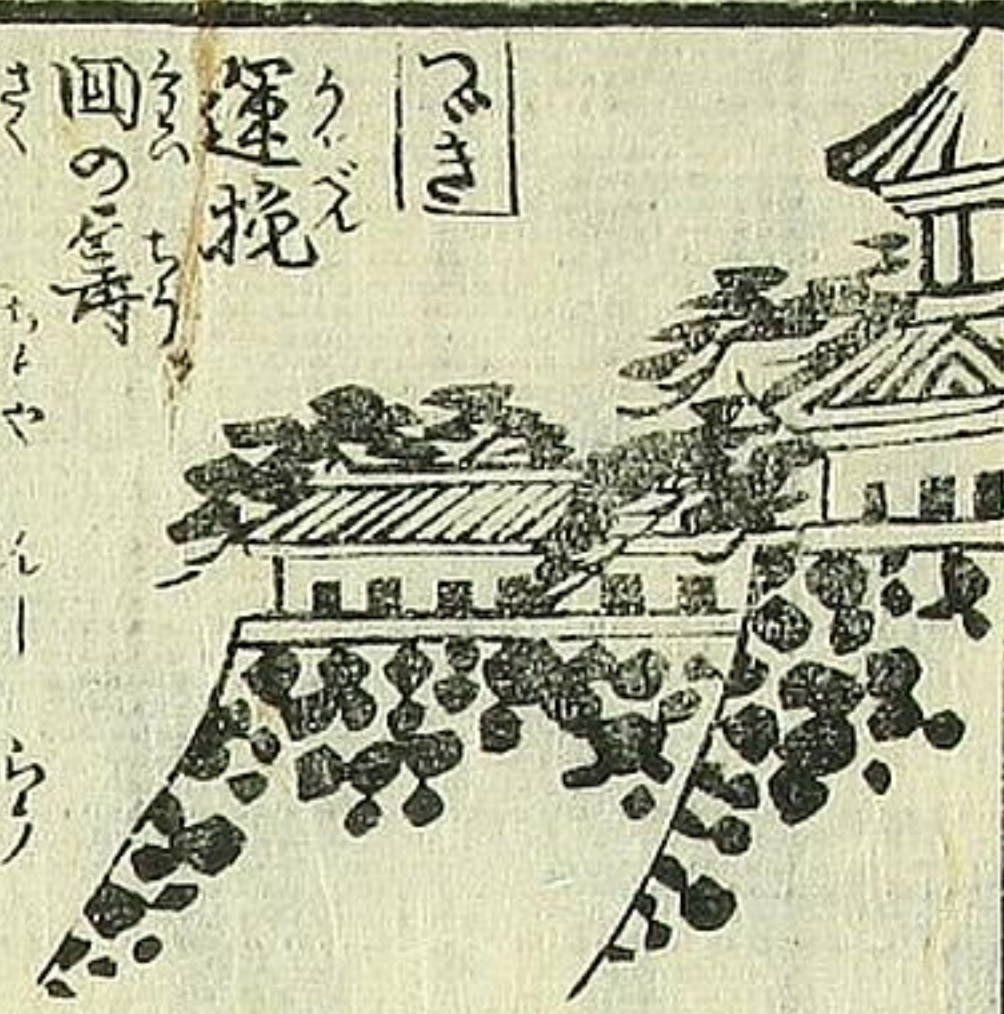


備ト
武張
俵りん
初め
津沙治
を侍の
世の暇
勢いぬ
あつんと
と進ひぬ
お徳や歳
寒ふし七松指

楠子之墓

の士と交
りも交
ろしとま
木和泉
の保原
とい同
國のみ
あとバ
敵金
友とあり
交際の
毎世





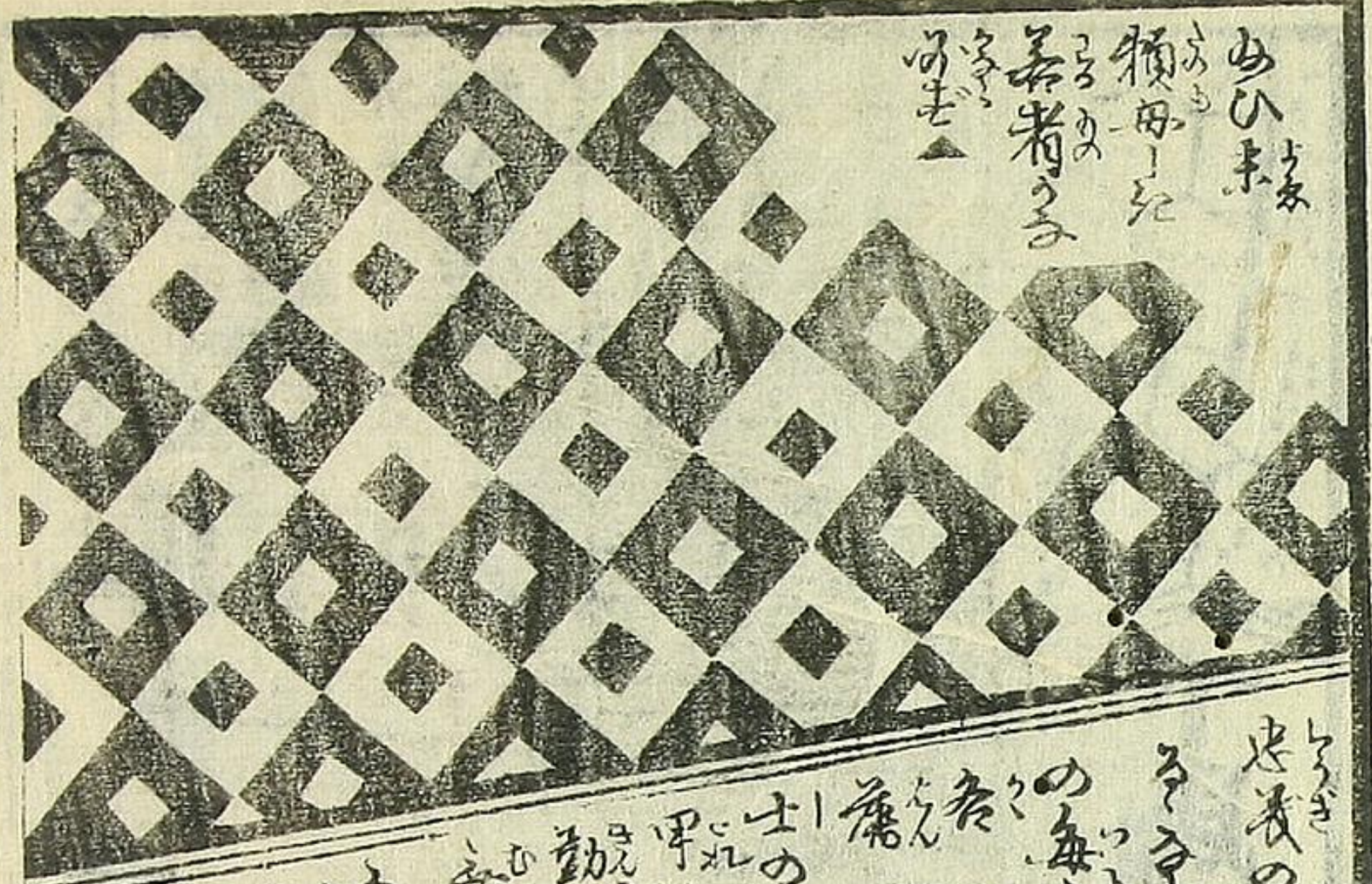
運挽
回の毒
舞の道夜心志と男
せーが真志の長物のみ志を
この山を意初年系
所の行運は戦ひ利
まくくそ海の國文主
山の森と消え義を
未世は終せよとこの



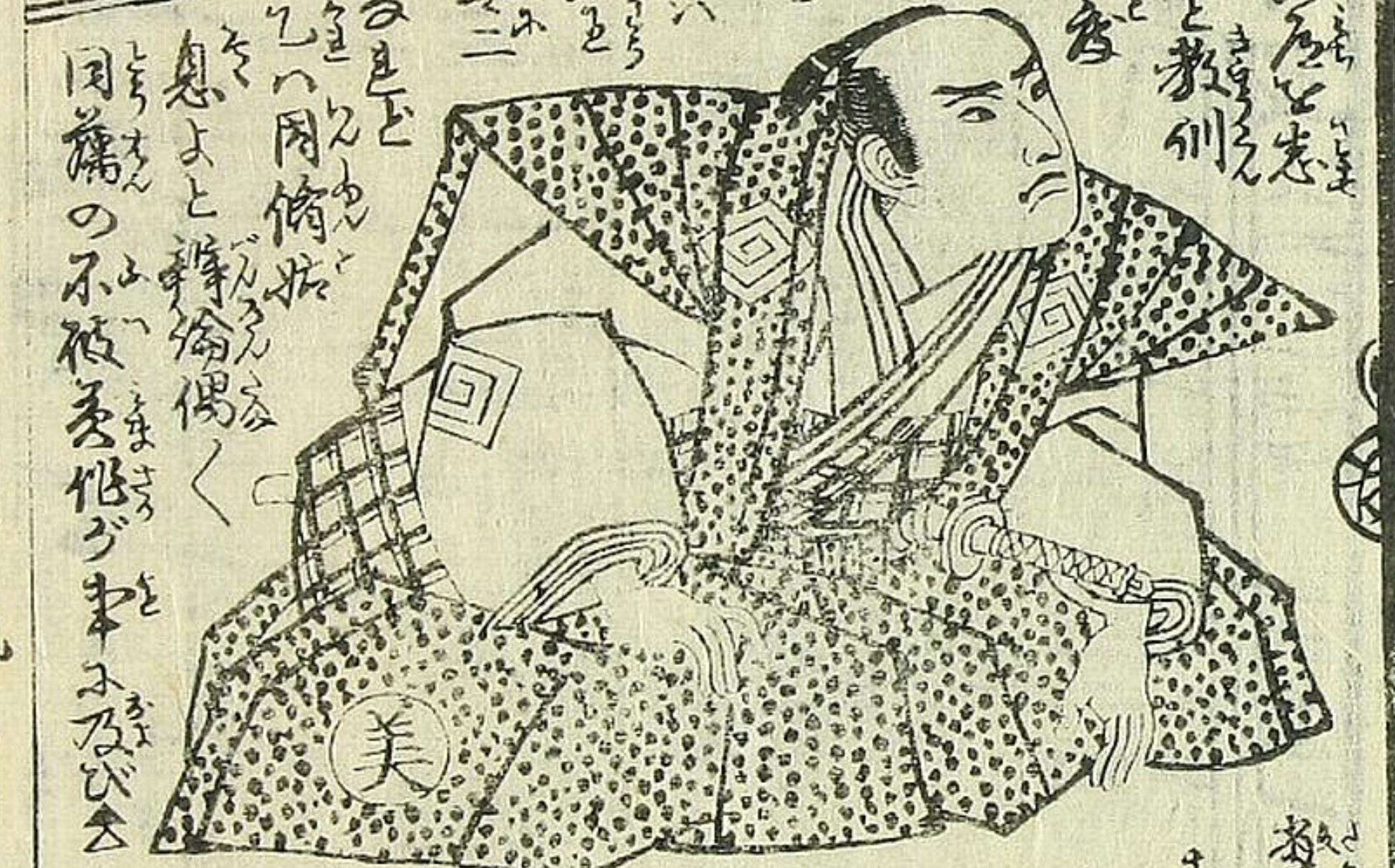
一早に早業角へ巻ひし
その此後命の年終と系
満道と其性大膽
強邁ゆえ終よ海年
國事と犯ま
板垣
かきあて
戒や蛇一す
みてをを
願へ



真志が同志の者小野り
遺書よ板垣の
怨のありとありし
くふ洞とそめ
海士考の板垣は密を
若り板垣通とれ
とふ元より義
勝の板垣は其
矢の情態の意
とふく通板垣地
同と輝るるむゆら其
實易の者よ其
と一子族若希よ其



あひま
頼母
若者

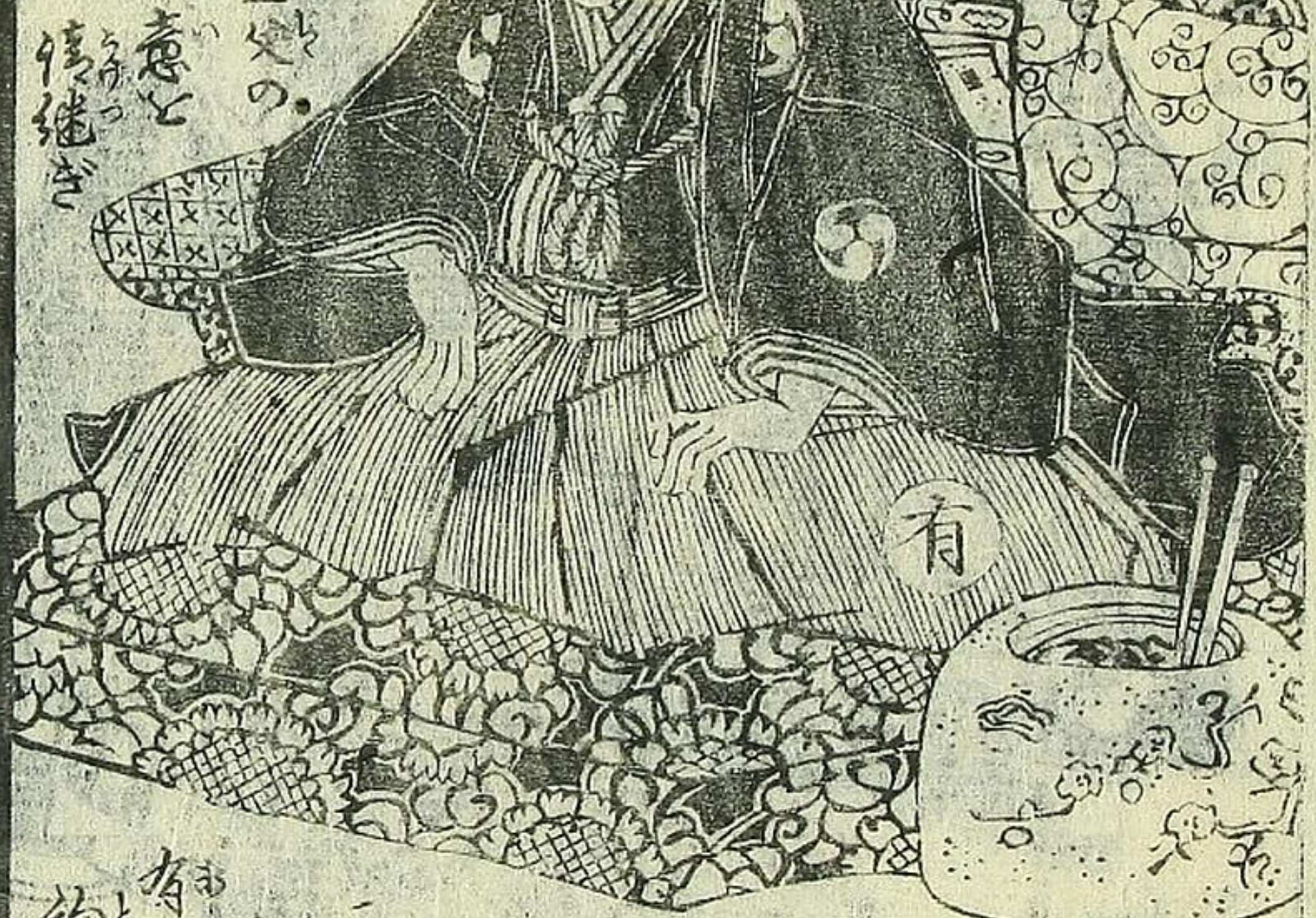


忠義の志を
つとむる者
の毎日を
甲斐
勤
美

黄尺切上



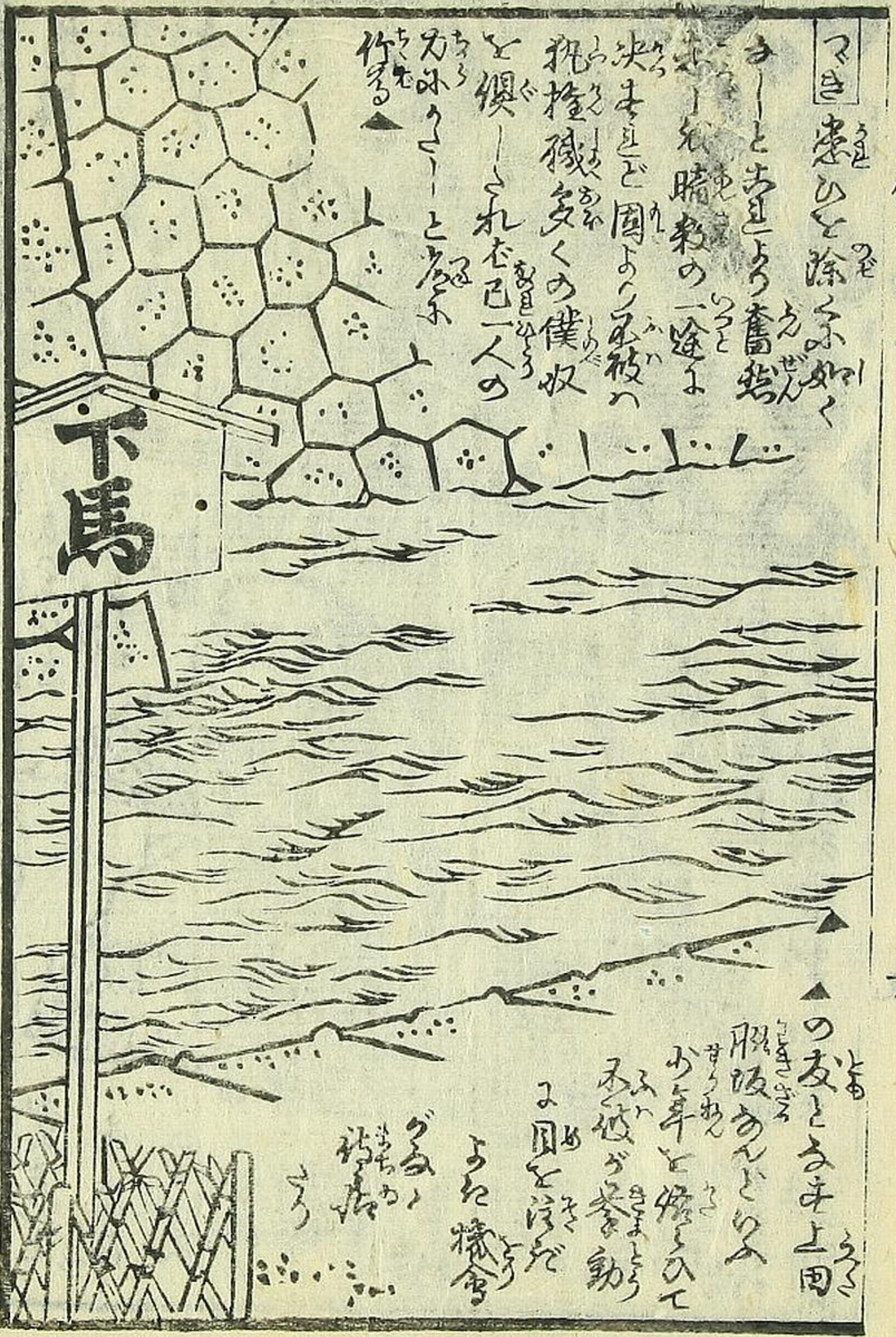
歎
又
密書
捧げ
の因縁
の強論
因縁と争を
事件ハ果と
殊小



大坂の
幕
者
なく
物
有
九列
有

月影

九



高橋阿傳夜叉神
 八尾編
 綾重衣紋廻春秋
 大

川上京邊繪
 五尾編
 名廣洋邊萍
 大

水錦隅田婿
 三尾編
 川上京邊繪
 三保
 大

格蘭氏傳倭文賞
 三尾編
 總相場花王夜嵐
 三尾編
 大

金地本問屋
 金公堂
 助





名廣 澤邊 初編

梅堂國政畫圖
京文舎文京著

左田長

中



A 487
2

名廣澤邊萍初編之中

東京

假名垣魯文校閱
京文舎文京著述

第二回

壯士の慷慨餘憤と秋水と流ま

血氣を運ぶ少津澤恩恵を別由をこそ不破美作を研城は彼
ま又付を一箇の向背定むる玉階の旗拳疾や軍神の血恣に及し血
塗へ今此時程縁るせぞと同盟の臍と澄めし朋友の上同義若膠坂甚吾
等と渚共は謀し合せし今夜の會合といひし彼奴も執務儀まご生若糸細
腕よて付を事へ容易らむ其計策へ移しと皆後を助がま謀とるりな
策十分は届き何方憚るも大車の密徑明日彼奴が退出と待て受け不
能てたつと一撃し一撃が富いと二人が互ひ目と目見合せて視と在
黙然と一頃へ變意三年十月中旬今宵の會儀のつりて例刻とる

黄尺の中

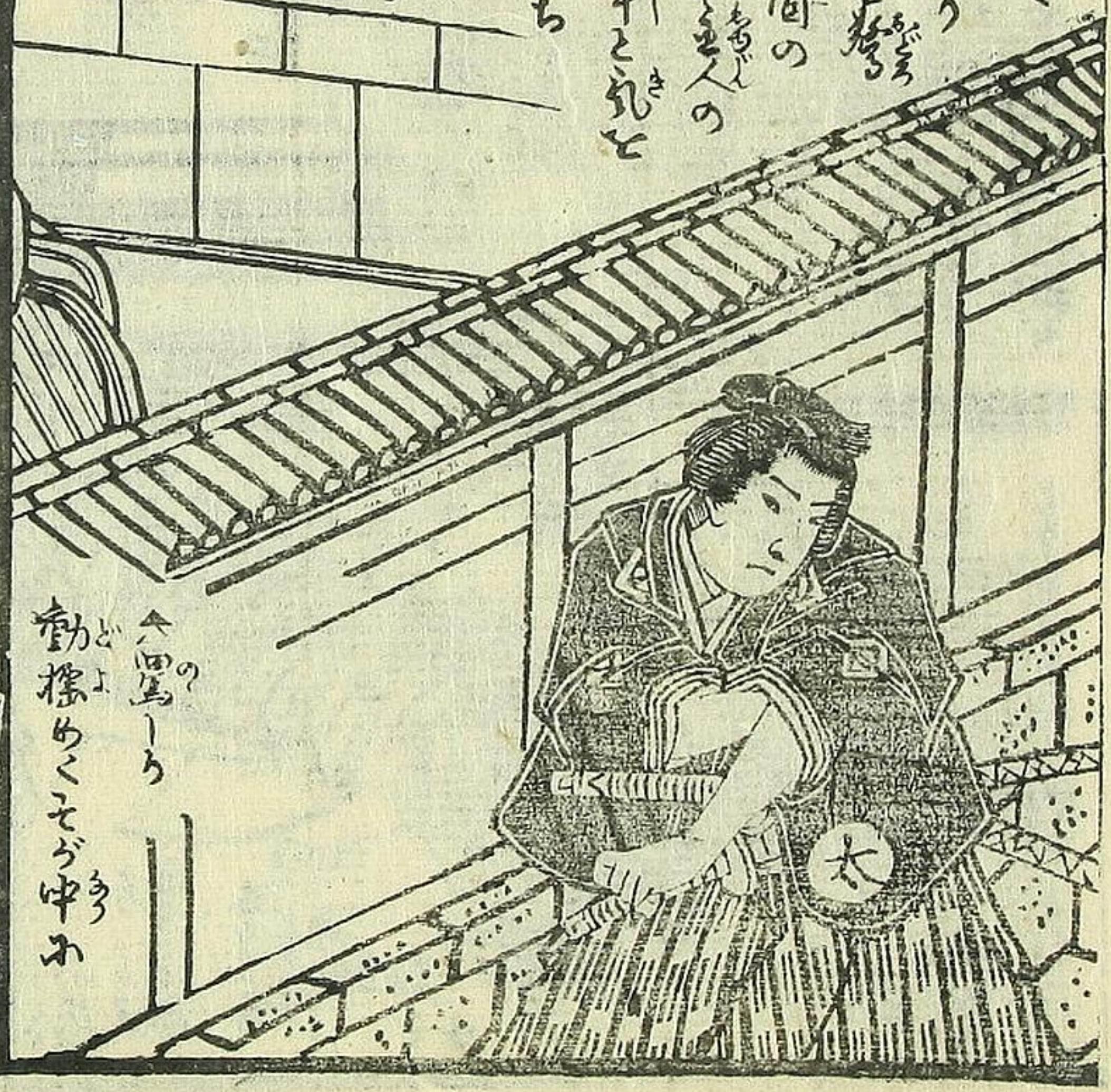


48-82377

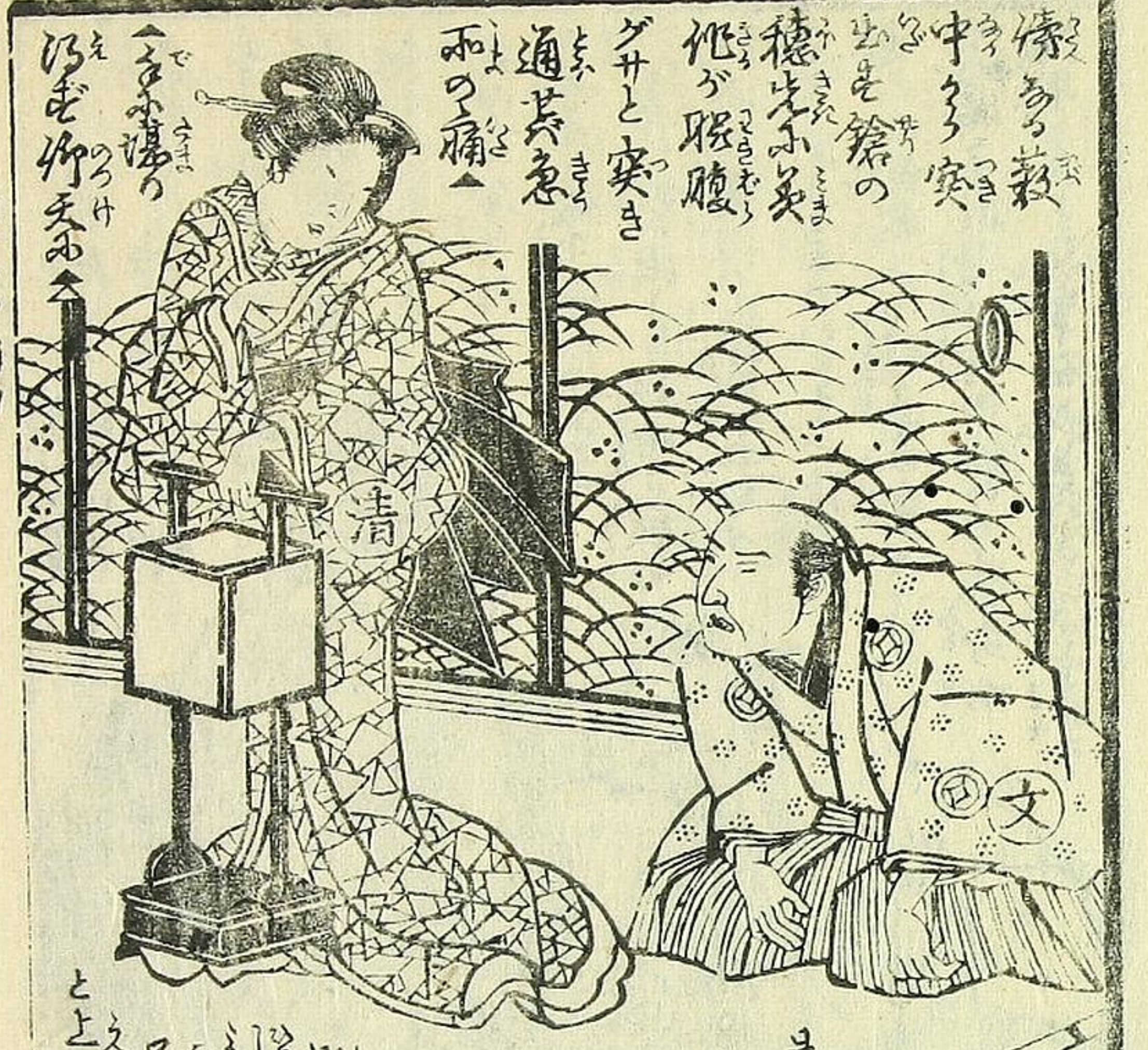


是の如く
 敵一人の小冠者
 日本史揚めよト
 下初よつと群がら
 蒐る多勢が基
 きて中ふ初めを
 左右よりと休ある
 此は惜しと一世の
 働き心の矢竹よ
 運且とも多勢よ
 いくで敵一人
 既も危きや知
 惟とい知らむ

二堂
 御まう
 是の如く
 く登同の
 武士一人の
 大幸と乳と
 鳥ら



六馬一り
 動揺めくそが中ふ



傍多敷
 中々突
 出は鎧の
 穂生ふ矣
 他が胆腹
 グサと突き
 通共急
 雨の痛

額らの其後振立て
 此後中よ曲者なり
 疾く脱出せと云降子我
 身入らんとす時一も再
 突き抜春小脚腹を一面
 的ら脱れんと行ふ所天
 方其時小笠を押し分けて
 懸金出さる支洞の最者
 衣袷とを知ら投捨て別
 伏する英池が影とわてた
 引掲げ勇気とて急する
 是別ち別人ありま板垣
 と上田重長と計りし合後

ついでに... 教と付...
 去ぬ...
 先...
 久...
 門...
 松...
 石...
 文...
 岡...
 一...
 二...
 三...



再と... 遠...
 亦...
 方...
 産...
 梅...
 門...
 終...
 産...
 備...
 捕...
 太...
 一...
 二...
 三...



ふき 押さひ一衣い合渡後人好者

巨卿の深被美化を付与する疾

攘夷の魁首を化を犠牲に

神國の傾むらう一廿邊を

挽回する其を為す執權

職を付与すこと半伴御

うち御も儀を不問看

御親と縁の外あり若

素文迄年側

始終の要の腕又

ぬへて野縁と親

子主縁之人が保

是を志せし

押させ一捕まの人数

文治の事と人海に門を

開けはるくと入り奉る不

頼らの某氏迄帝とを大腕

の中此後大友の攝権を

総権職を付与さる

主権者さるより命令

うて我とが捕縛の

も推察せりと命と

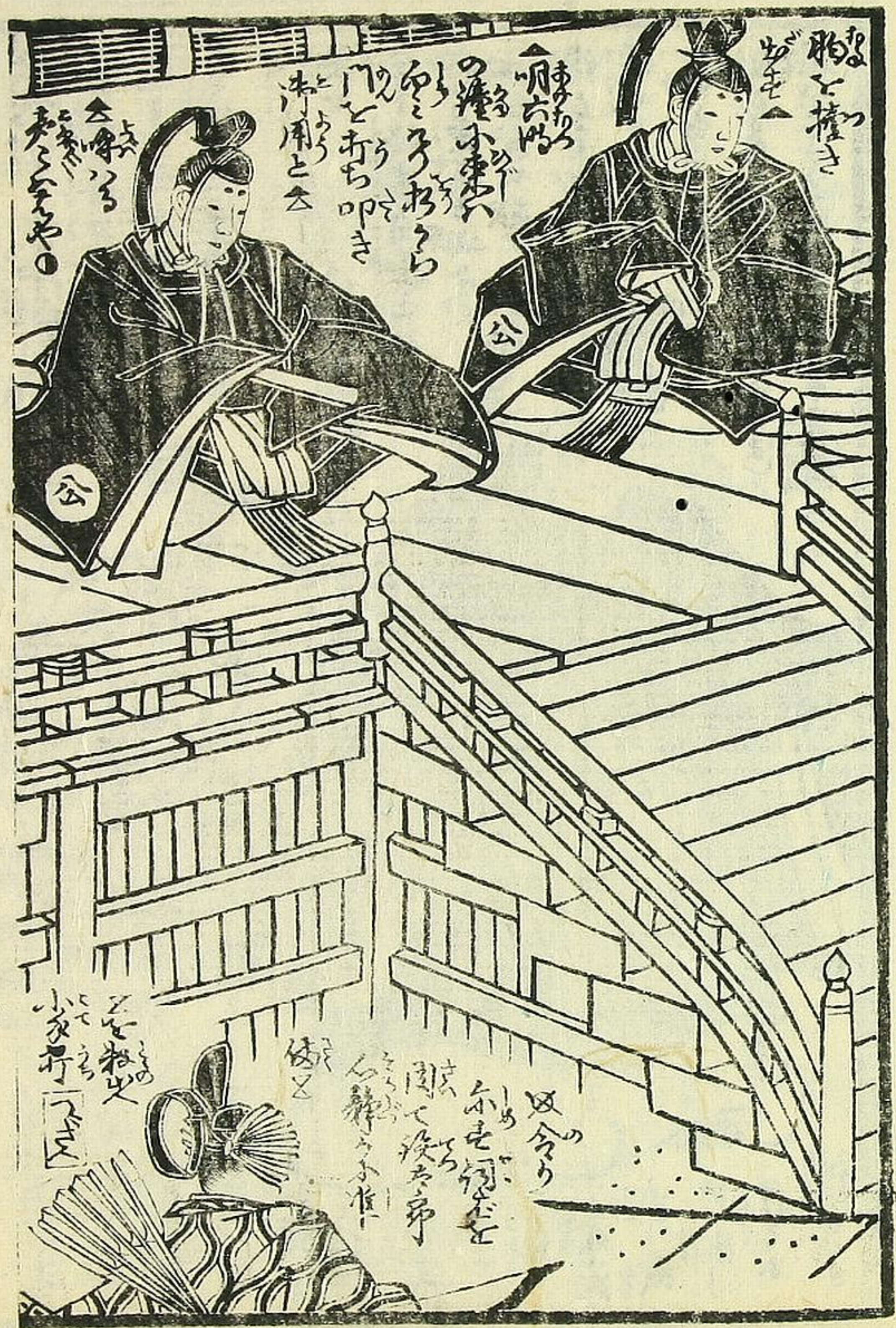
嚴う不



物と推さ

御六代

の権小兼六
命とすおら
門とすら叩き
清用と云



下きまゝに他山同志の者としてあり方今
天下の形勢を憂はるる如かりしは
義を執つてその弊を治すべしと
彼はやがて此明瞭の目
ありて男児が事を奉る
の用より死にあらざると是の覚悟
唯恐者多し固法は死せらるる
一月も早く死つて
ふまは飯合の水
の傍に小舟を
引寄せらるるも白紙
のまはりの一と死を
極めたる健丸の
さぬ小舟の宿業も

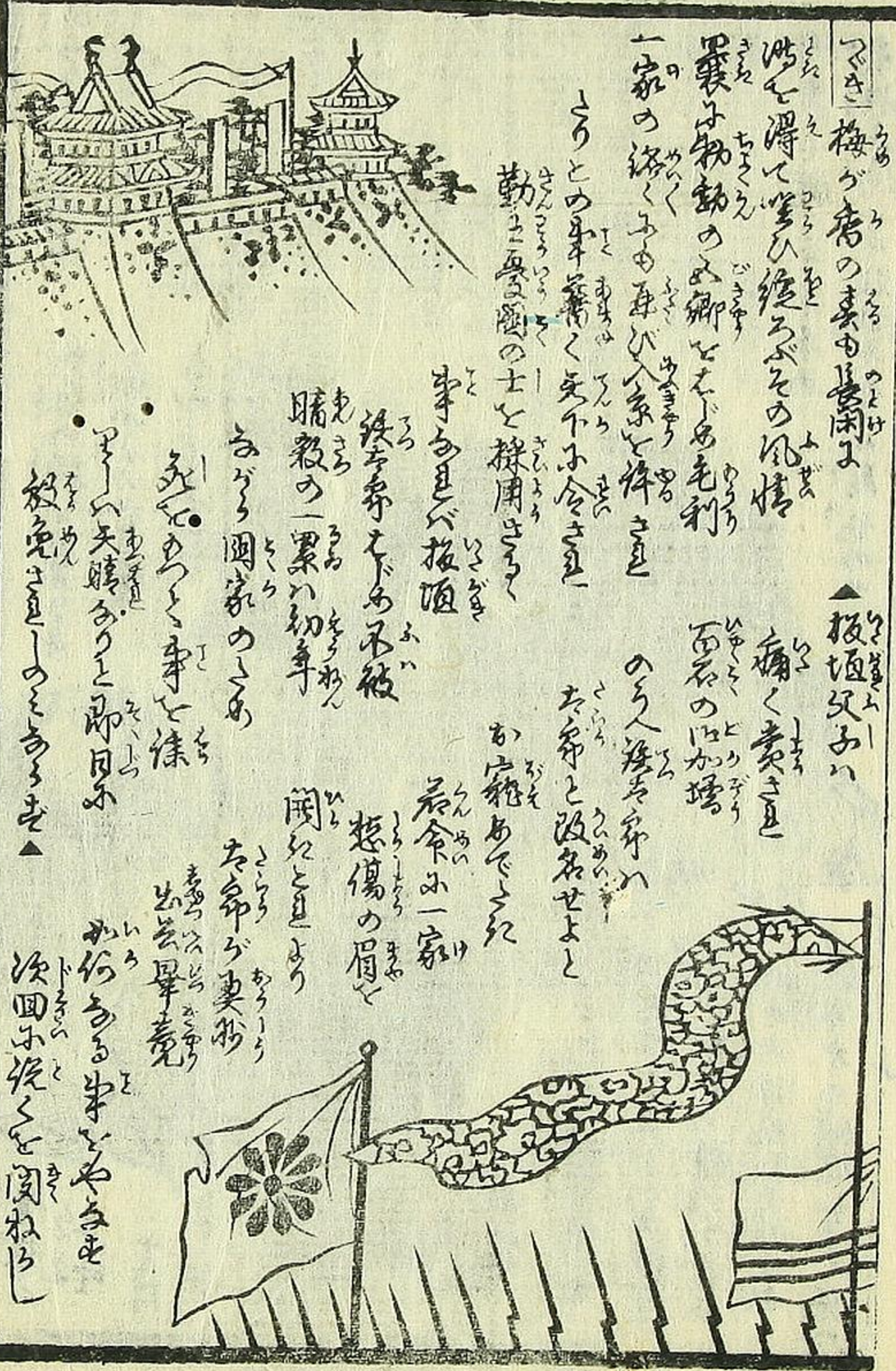


公密に小獲清の
久米第一篇の
ふまは飯合の水
の傍に小舟を
引寄せらるるも白紙
のまはりの一と死を
極めたる健丸の
さぬ小舟の宿業も

感ある一愛徳の
情類のまじりたる
あはれがまじりたる
ど一日と二日と紀元と
近きや獄中のあはれ
長たしを送りしあはれ
板垣を身妻と奉る
秋と冬に一年のあはれ
の老後と云ふぬ
右宰相の縁徳
あはれがまじりたる
海士のくまの事件と
徳一備を奉るの
乳母を送る板垣を身妻と奉るの



所存の勝と健丸の
あはれがまじりたる
ど一日と二日と紀元と
近きや獄中のあはれ
長たしを送りしあはれ
板垣を身妻と奉る
秋と冬に一年のあはれ
の老後と云ふぬ
右宰相の縁徳
あはれがまじりたる
海士のくまの事件と
徳一備を奉るの
乳母を送る板垣を身妻と奉るの



梅が唐のまゆ長閑よ
 此を得て望み絶ふその風情
 巽子物動のぬ郷と下名毛利
 一家の縁くふも再び入系と伴さる
 この事業著く先下小令さる
 勤上長閑の士と採用さる
 半の目六板頭
 後系下あ不彼
 晴殺の一累の切手
 ちがう國家のこゝろ
 ちがうの事と係
 ちがうの天晴ありと即日
 赦免さる一のちがうさる

板垣父あい
 痛く責さる
 百石のほか塔
 のう人後系あ
 ちがうと改名せよと
 おはれあてさる
 君令ふ一家
 想傷の眉
 閑れさるより
 ちがうが更紗
 出雲畢亮
 ちがうさる半とちがう
 次回小後とを閑ねし

高橋氏傳後又評

八尾編 綾車夜紋通春秋 人尾編

國定東次首名見通

九尾編 名廣澤邊洋 人尾編

水錦満田曙

三尾編 曉詳 三僕 人尾編

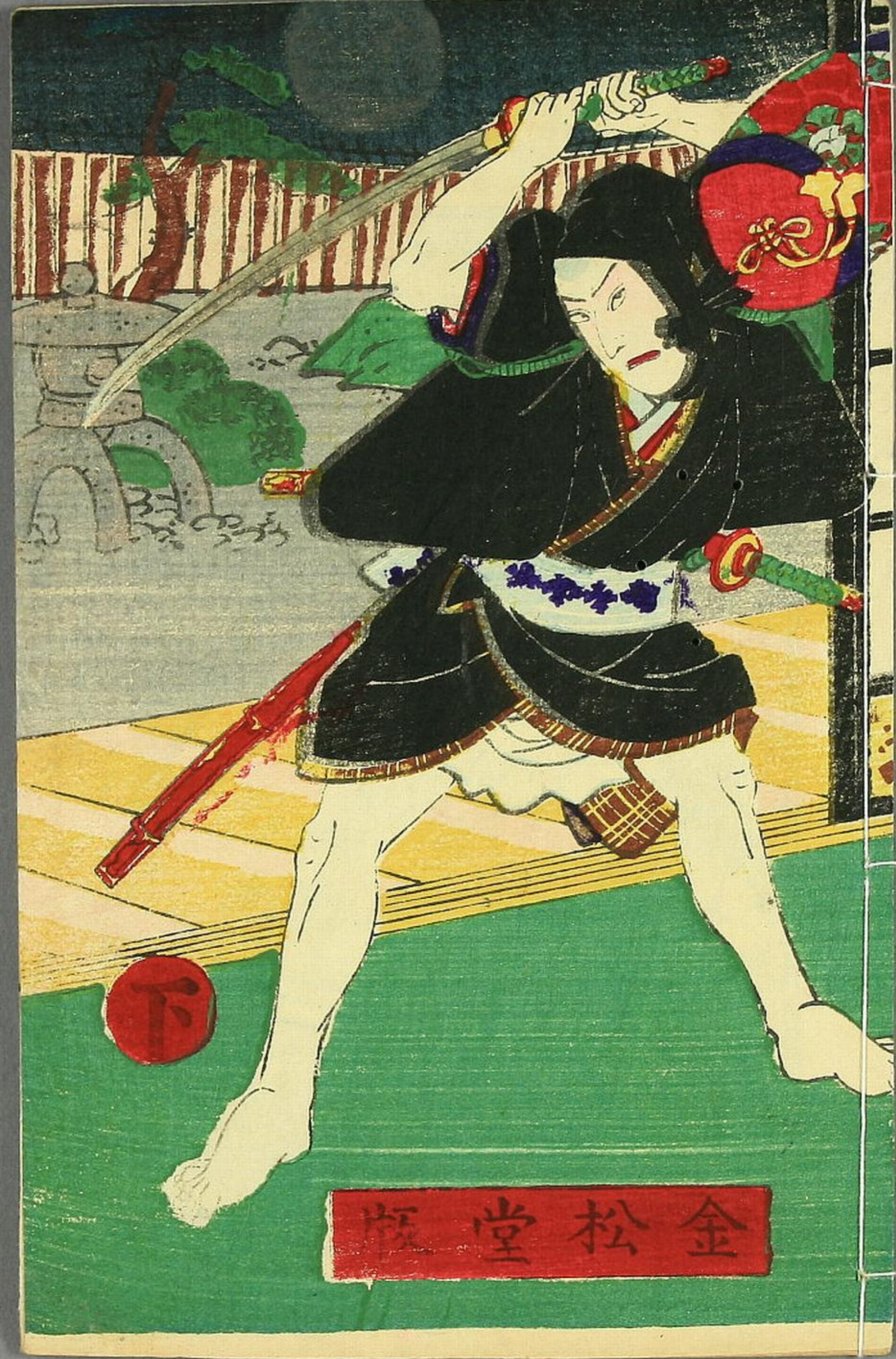
格蘭氏傳倭文賞

三尾編 總相場在王夜嵐 大尾編

令地小問屋

金松堂 江州 物





A487
3

假名垣魯文校閱
物語圖改重圖



<48-0238>

名廣澤邊萍初編之下

東京 假名垣魯文校閱
京文舎文京著述

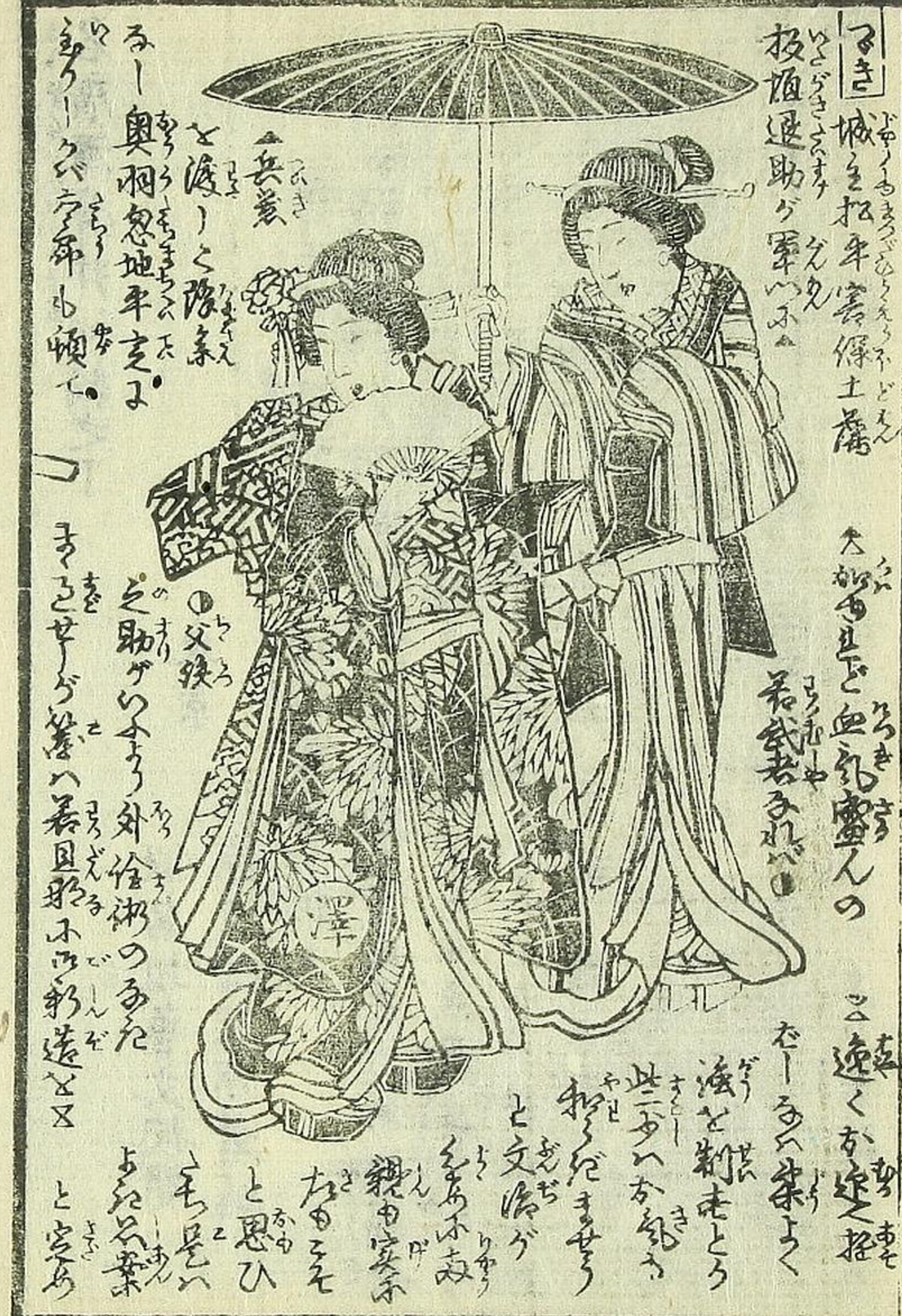
第三回 情と含と澤江憂苦と訴ふ

慶應四年の改より明治元年正月以降會津をとり奥羽を
藩王命よ北城き錦旗よ對して抗戦をせむ薩長土肥の
四藩と看と一之富米の藩士も官軍の一とあり奥羽へ出兵
み一たるよ幼年るがう板垣太郎ハ参謀の職を連るりまご
十又歳の小冠者るまご其性者真田幸村が智謀を彼に優
るとも劣るをうも見えざりたる徳とバ数度の接戦不之
米の兵へ利を失せしむも破竹の勢ひも勝は親なる長蛇の
飯え不測の敵も敵一の孫同年九月下旬に至り會津の



豊陣を一故郷一降る
 旗の旗はめく風の
 波をたはする重代の
 若衆のゆめまじ
 増す家の栄え
 國政の糸興
 先づの糸とあり
 ながさ遠不羅の
 を命が一瞬天賦の性
 真毛の屋せど勤もまれ
 八珠累の振籠あると
 閑きお親も痛くあま
 其がと殿と戒めんとあ
 又と

つたへ
 彼と
 小姓
 同僚中
 命は不
 高時
 甲兵
 けん乙
 らんと
 命は不
 高時
 同僚中
 小姓
 彼と



長巻
 と海一と陸糸
 る一奥羽忽地平まよ
 る一六六平巾頼心

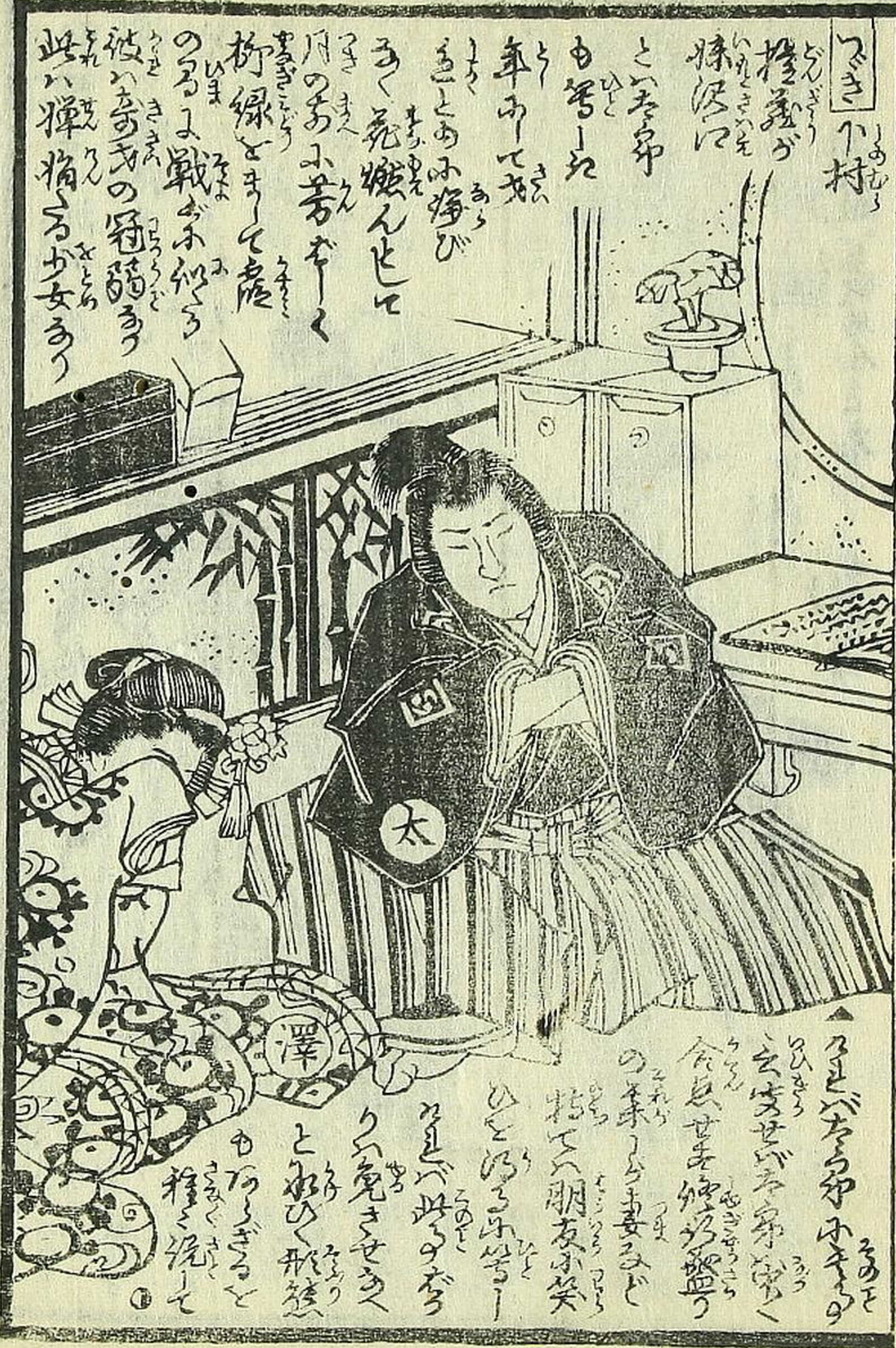
父狭
 之助のふう外伝のあた
 まるせが巻ハ若旦那小江新造と

遠くか途之控
 衣一の糸よ
 法と新走と
 些少のかる
 物にまき
 と文治が
 をあふぬ
 親中家不
 たゆこそ
 と思ひ
 毛はは
 ぶら糸
 と空

可き
 城を松平家保土藩
 板垣退助が軍いふ

大如直と血氣盛人の
 若武者子れ

遠くか途之控
 衣一の糸よ



つぎ 下村
 推義が
 妹は
 とて
 由
 年
 色
 子
 月
 柳
 の
 彼
 此

つぎ 下村
 推義が
 妹は
 とて
 由
 年
 色
 子
 月
 柳
 の
 彼
 此



その
 玉
 此
 宮
 と
 ふ
 小
 扱
 と
 家
 果
 縁
 痛

つぎ 下村
 推義が
 妹は
 とて
 由
 年
 色
 子
 月
 柳
 の
 彼
 此



つぎ ちた
 横子なるはあ
 親族の善悪文由
 少くもは
 むるもく
 又もやそ命
 の奉勤
 死を決するを和源と為れる小
 むく閉る世の憂遷移帳
 源難言あるは明治二年
 の春二月奉天の卜奉土の

源
 少くもは封達倫と主源と今奉源
 精進還の二奉と不可あり
 と一嘆と已見が

彼長源のそ中奉
 大楽源奉命とつた元
 一孫兵衛の徳長
 戦一たり中同
 奮勇を進る弟舟上同
 多分の精進倫後
 さはを倫有さるのそ
 う峰二弟が英武を
 精進小解源のそ



漢のち五王ふらうさうらん
 我物類よ素親友と國を領する
 獨をさしと薩長土肥の四藩よ
 早くも後ふ藩同して薩長を
 還せんとしてせは多きも朝廷へ
 遠向せしは是を直封達世
 徳と一愛一敬縣制をさるの
 嗚矢や國の東情備
 藩の魁首実小治世の
 車見あらんまはと維新
 の日あは漬くまは血腥
 ぶさた武の控勤もまは六激
 烈情事と候まるはるなふかま

木
 日策つき
 て身とある木次へ
 究

傳へ一藩小ゆ系と達
 せくは彼大楽源と弟ハ
 素より源倫のそさる如
 一たり小の
 清士の精勤
 一は一藩互小
 去黨とそち木
 先舟上と
 抗戦と培教
 小治源これ
 究

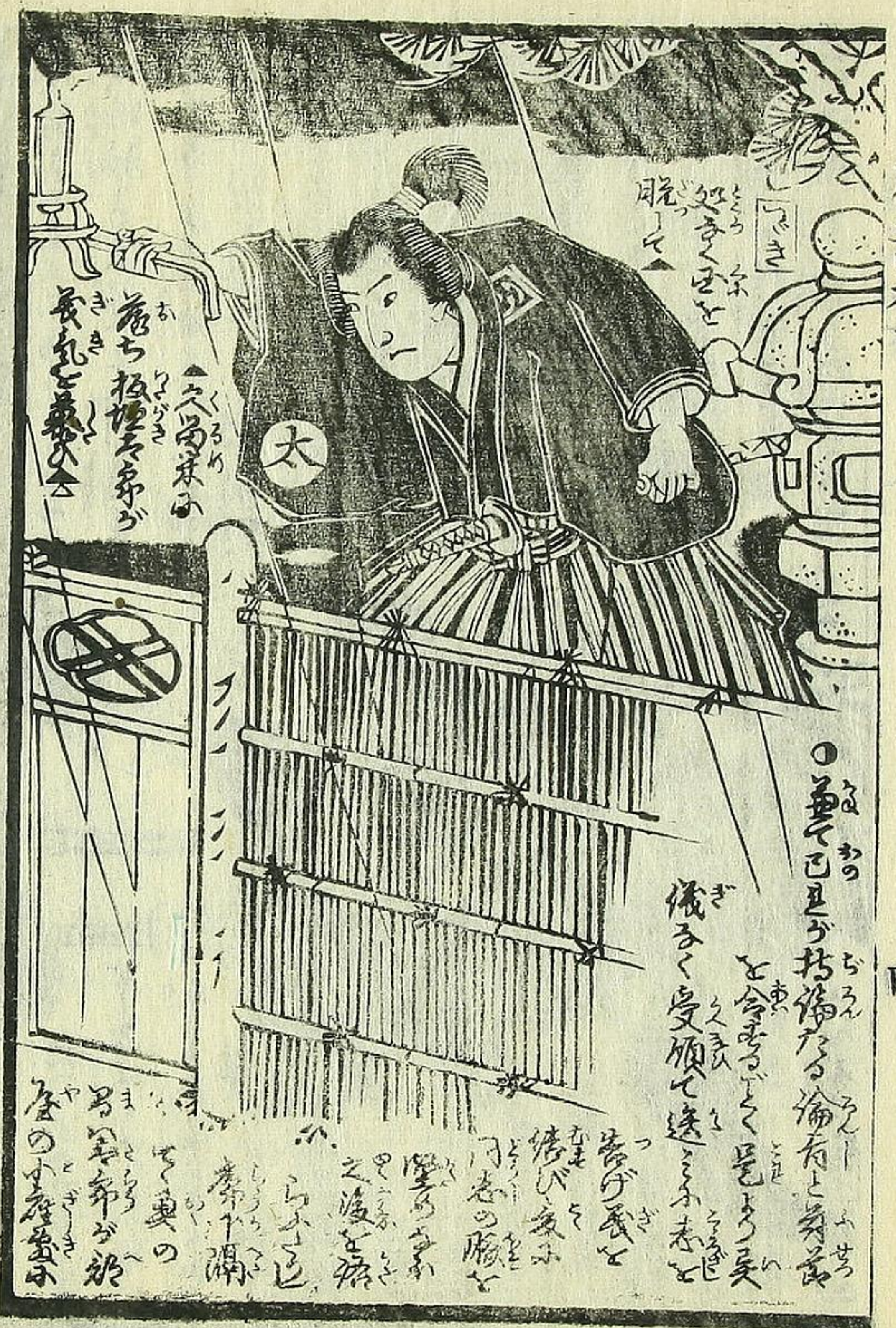


其の
 後と
 七五切
 本亦
 南村
 指並
 其の
 本亦

此の
 世の
 友
 と
 其の
 後
 其の
 後
 其の
 後

尺下

尺下



大
 其の
 後と
 七五切
 本亦
 南村
 指並
 其の
 本亦

此の
 世の
 友
 と
 其の
 後
 其の
 後
 其の
 後

尺下

尺下



つぎ ちつと智者の
遠謀者君の壯意
見接と離れど
女子の儀分つ終不
振捨らばとてかた
死なんらうおんが
又もつてたぐはき
固入とたなむまへ
強て預ふの難縁の
二世の契りの必まよ
かんわつとせぬふと
墓もたつと本縁
樹を契る被ふい

其件の素梅
條と関とまよ
心まよるまよ
ぬ軍一席
お城の
吾知
且我
胸中へおん
あらん疾
宿みと居るとまよ
但まよとまよ今更ふ
胸もろ裂け腸も
折るかひい

六千石を
量り善か
帳簿の
頼ひゆ入
別々まよ
けまよ人の
風流まよ
まよの
まよの
代者の
まよ
久留まよ
入りまよ



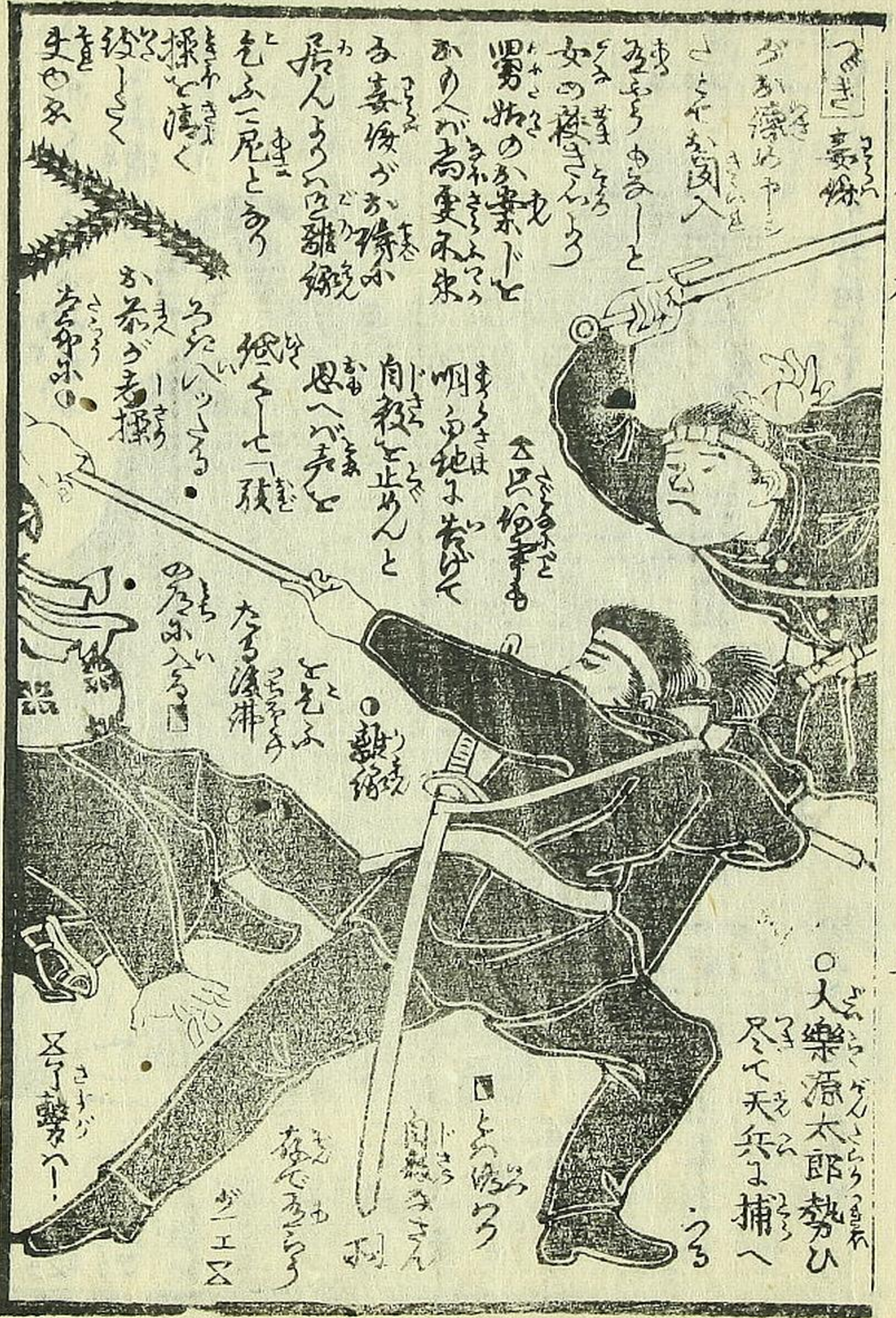
怜れく身えての恍惚子
ある未通心の
衣色さ
去来も
不繫舟をわれ
涙はか難縁
乞ふん船より
お舟
沈吟
下階
此際
へ居る
一巻に對して離縁を重むるのた

胸中へおん
あらん疾
宿みと居るとまよ
但まよとまよ今更ふ
胸もろ裂け腸も
折るかひい

朝延の
難関の
あつと関ふ
つて胸塞
つて胸塞
つて胸塞

お舟
沈吟
下階
此際
へ居る
一巻に對して離縁を重むるのた





○大樂源太郎勢ひ
尽て天兵は捕へ



この本平頼ひ
とてると海をひ
さへむせ久
りコト流き
入る肚裏
とを生中若ま
さん覚悟さ
め備ぎりと
あふ茶のしん
ま、妹と寄の
契りさへ換まれ
うの者ふさおれ
知らうひさるの
▲



假名垣魯文

九

假名垣魯文校閱

京文舎文京著述



梅堂國政画圖

假名垣魯文著述
 立派に桐野利秋の面影
 あり海つらぬの半後不
 後保二人が別離の海
 逆ふ不靴と
 とうらの瑞緒
 半虎の奇
 りとや
 きまむ

紙屑不委々
 呪と因ねじ

鳥島同傳夜叉譚

八尾編

綾重夜叉夜叉譚

大尾編

川一鼠夜叉譚

五尾編

石廣洋邊萍

大尾編

水錦隅田婿

大尾編

腕鏡心三俣

大尾編

格蘭氏傳倭文賞

大尾編

徳相場花王夜嵐

大尾編

地本問屋

金公堂 助

010190512032



飯谷恒魯文校定東京
文系著述園政画

明治二十三年春新板
重松堂梓

